

二〇一二年 度

第三回 全統高2模試問題

国語

二〇一二年十一月実施

(八〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は24ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の該当する解答用紙を切り離し、所定欄に **氏名** (漢字及びフリガナ)、 **在学高校名**、 **クラス名**、 **出席番号**、 **受験番号** (受験票発行の場合のみ) を明確に記入すること。
- 五、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 六、試験終了の合図で右記四、の の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

技術文明そのものを哲学の主題にして思索した人がいます。20世紀最大のドイツの哲学者ハイデガーです。彼は、西欧の哲学史の見直しという大作業のなかで技術の意味を問い直す、という重要な試みを行った。

ここでは、木田元さんの『ハイデガーの思想』などの助けを借りつつ、私なりのくだいた素描をしてみましょう。

¹ エネルギーという語は、もともとギリシャ語の「エネルゲイア」から発しています。「エネルゲイア」とはアリストテレスの言葉で、ある物事が現実存在している状態で、だからこれは「現実態」と訳されます。

そしてこの「エネルゲイア（現実態）」とは、ただ何かが現実存在にそこにおかれてあるということではなく、何かが生成し発現し、その結果として最終的な形をとり、ある目的をもつてそこにある、という含みをもっているのです。ある事柄が、生成する運動の行き着いた最終的な形としてそこに現前するのです。

たとえば美しい花は、胚芽^{はいが}から始まり生成し変成し、最終的な形としてそこにある花を咲かせている。こういうイメージを描けばよいかもしれません。そして、実は、この何かが生成し発現してある形をとるという運動をギリシャでは「自然（ピュシス）」という。

だから「自然」とはギリシャ人にとっては、自ずと生成し変転してゆく運動なのです。おのずから発現してゆくことです。だから、ギリシャ人にとって、すべてのものは、何かよくわからない混沌^{こん沌}から生成し発現してゆく運動、すなわち「自然」^aのキケツ^aなのです。

ところが、実は、アリストテレスの前にプラトンがいる。そして、プラトン²は、この「ギリシャ的自然」とは少し異なった考え方をしていたようです。

プラトンといえば「イデア論」が有名で、「イデア」とは、物事の抽象的で超感覚的な本質であり、またその物事の本質を示す理念（形）^aとあってよい。

たとえば次のようなことを考えればよいでしょう。鎌倉時代の彫像家の運慶はすばらしい仏の像や菩薩像を彫り出しています。その時、プラトンならこういうでしょう。目には見えない仏のアイデアがまずあり、そのアイデアを実現すべく、運慶は木材という素材に働きかけて彫像を制作した、と。

ここで大事なことは、仏のアイデアという抽象的で理念的でいってみれば超越的なイメージ（形）がまずあって、それに対して、彫像家が働きかける具体的な材料である木材が他方にある。この「材料」に働きかけてそこに「アイデア」を可視化する「形」を実現する。かくてある物が存在することになる。この考えからすると、この「材料」こそが「自然」なのです。

いいかえれば「自然」とは、人の理性の力によって、アイデアを実現するように作り替えられる無機質の何ものかなのです。これはもはやすべてを包み込んで生成するものではなく、人がそれに働きかける対象なのです。人は、アイデアを実現すべく無機的な「自然」に作用し、これを作り替えることができるのです。

しかしもともとのギリシャの自然観においてはだいぶ違っている。たとえば、運慶が仏の彫像を彫り出すという例をもう一度考えてみましょう。この場合には次のように理解するのが適当でしょう。

現実にもそこにある彫像は、混沌の中から自然に生成し発現してきたもののなのです。それは自然に働きかけるのではなく、自然の働きによって生成し、いで来たったのです。彫像家はあらかじめ思い描いたアイデアという理念に従って自然に働きかけて彫像を作り出すのではなく、ただ自然の働きの手助けをして彫像を取りだすのです。

言い換えれば、彫像の形は自然のなかに潜在しているといってもよい。しかし、それはあくまで潜在もしくは伏在するだけでアイデアというような理念的本質ではありません。そして、彫像家は、この伏在するものを彫り出し、明るみにだすだけなのです。それをまた言い換えれば、この彫像は、自然のなから生成し発現するということになるでしょう。彫像家の仕事は、この自然の運動の手助けに過ぎず、その手助けを「テクネー」というわけです。だから、「テクネー」とは、自然をハツロさせ、^b ち開かせる作用で、「技術」というだけではなく、「職人仕事」や「芸術」とも深くかかわった概念なのです。

だがこの「ギリシャ的思考」はわれわれ日本人にはむしろなじみやすいことなのではないでしょうか。

日本ではかつては自然は「じねん」であり、「おのずからなるもの」でした。ギリシャの発想は、むしろ、日本の「自然（じねん）」に近い。

じつさい、一流の仏師は、仏を制作するのではなく、木を彫ることで、自ずと現生してゆく仏を取り出す手助けをしたのです。
A、日本の華道は、西欧のフラワー・アレンジメントが制作者の個性を出そうとするのとは違い、制作者の個性を殺すことで自ずと「花」が自らを作品として現れ出てくる、という面が強い。

もともと、生成し流転してゆく運動、おのずから何かになり変成してゆくもの、それが日本の自然であり、それは決して人間がそれに働きかけて自らの都合に合わせて変形できる無機質のものではないのです。

ところが西欧では、「ギリシヤ的な思考」ではなく、「プラトンの思考」がその後の西欧文化を支配することになった。

プラトンの「イデア」は「神」になったり「理性」になったり「精神」になったりしながらも、自らの「イデア」つまり「理想」の世界を実現すべく自然に働きかけ、これを変形し、支配しようとしたのです。

そして、人間が自らの「理想世界」を実現すべく「自然」を支配し、そこから人間にとって必要な力を引きだすとき、それを「エネルギー」と呼んだのです。自然のなかに堆積されており、人間によって引き出され利用されるべき力なのです。

この「エネルギー」が、アリストテレス的な「エネルギー」とかなり違うことはいままでもないでしょう。アリストテレス的な「エネルギー」は、あくまで自然のなから生成し現生して現実になった姿なのです。

確かに、それは自然が生み出したものです。しかし、自然が「エネルギー」を生みだすとき、主体になっているのは自然の方であって、人間はその自然の生み出す作用をせいぜい助けているに過ぎない。人間は、自然の発現する力（エネルギー）の手助けをし、その力によって現実にあるものをそこにあらしめるだけなのです。

これが「テクネー」すなわち「技術」であって、そうだとすると「技術」とは、もともと自然のもっている力が生み出す運動を人間が手助けすることにほかならない。自然が現実の物を生みだす働きに寄り添うのが「技術」ということになるでしょう。それは、決して、人間の幸福のために自然をねじふせ、それを支配する手段ということではなかった。

B、農夫が土地に働きかけそこから^dシウカクを得る、これは決して自然に対立することではない。農夫の仕事は、コクモツの種をまくことにあり、生育は自然の生長力に任せる。彼はそれを見守るだけなのです。これは決して大地を「挑発」することではない、とハイデガーはいいます。

近代技術は、物理学という専門科学とともに生まれる。物理学に支えられた近代技術は自然からエネルギーを取り出すのだが、それは自然に即したのではなく、自然を「挑発」するという形で、自然を機械的なプロセスへと組み立て、有用性や効率性へと送りだすのです。

ここに現代の「技術」の性格がある。それは、本来の「自然」が内蔵しているものの発現を手助けする「テクネー」ではなく、自然に^{たいじ}対峙し、それを支配し、それに挑戦する。物理学が出てきたときに、それと結合した技術が「近代技術（テクノロジー）」という専門科学の一変種として、産業化を可能としたのです。

産業化によって、人は物的な富の蓄積を幸福だとみなし、技術によっていくらかでも富を増進できるという技術信仰を生みだしました。

C、ハイデガーは、あきらかに近代技術の暴走に対して強い警戒感と嫌悪感を抱いていますが、決して時間を逆転させて、前近代の農耕社会へ戻ろうなどというわけではありません。「テクネー」から「テクノロジー」へと移行したときに、われわれがすでに現代の高度な技術主義に取り込まれているというのは歴史の必然なのです。

D、今さら、反技術主義を掲げて農耕生活へと^eタイキヤクすることはできません。しかし、ここで実はある大事なことに気がつくのではないでしょうか。

そもそも近代技術は、われわれ人間が自然を支配し、自らの手で自らの幸福の条件を作り出すためのものでした。

E、今日生じていることは、人は、様々な専門科学と結合した技術が生みだす強固な機械的システムの中にからめとられているのです。

ハイデガーは、そこにこそ近代技術の本質がある、といいます。

人間は決して技術の主人になることはない。

しかし、また、この無能の自覚において、人は、自然のうちにあり、何か計り知れない、算定できない、まだ覆い隠された力の秘密へといざなわれるのではないか、とも彼はいうのです。

結局、この現代技術の最先端において、われわれは、あのギリシャの古人と同様、計り知れない自然の力の前にひざまずき、その覆い隠された力を改めてまざまざと知るほかない。

そこで、もう一度、なぜギリシャ人が、自然を支配するなどと考えずに、人は自然に寄り添い、自然の内蔵するものを引き出す手助けをする、と考えたのかに思いを致すことができるのではないでしょうか。

それは、日本の場合には、日本古来の「自然（じねん）」へ思いを致す、ということなのです。

むろん、「現代テクノロジー」を「テクネー」へ戻すことはできません。しかし、「テクノロジー」への志向のうちに、「テクネー」への思いを持ちこむことで、われわれは現代技術の暴走を多少でも遅らせることができるのではないのでしょうか。

（佐伯啓思『反・幸福論』）

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

く

E

を補うのに最も適当なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア さて

イ また

ウ たとえば

エ ところが

オ なぜなら

カ だから

問三 傍線部1「エネルギーという語は、もともとギリシャ語の『エネルギー』から発しています」とあるが、ここで言う「エネルギー」とは異質な「エネルギー」について端的に説明した箇所を、本文中から三十字以上三十五字以内（句読点等を含む）で抜き出し、その最初と最後の五字を書け。

問四 傍線部2「プラトンは、この『ギリシャ的自然』とは少し異なった考え方をしていたようです」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。
ア アリストテレスが混沌の中からおのずと生成変化する流動性を自然の本質としたのに対し、プラトンは他の何物によっても変わることのない恒常性を自然の本質とした。

イ プラトンは、何物かが生成運動の中から現れたものを自然と規定するアリストテレスの考え方を批判し、自然は人間が働きかける対象として現前するという自然観を表明した。

ウ プラトンは、自然の本質を混沌の中からおのずと生成し発現する運動それ自体ではなく、人間主体が理性の力によって物事の本質を引き出すために働きかける客体と把握していた。

エ プラトンは、古代ギリシャ人にとって自明の自然観を受け入れようとせず、自然の中に潜在するイデアに働きかけることによって現実の事物が生成し発現してくる考えた。

オ アリストテレスが生成する運動が行き着いた最終的な形として自然を捉えたのに対して、プラトンは最初から完成された形をそなえた超越的存在として自然を捉えた。

問五 傍線部3「『テクノロジー』への志向のうちに、『テクネー』への思いを持ちこむ」とあるが、これはどういうことか。本文の趣旨を踏まえて百二十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 自然をおのずからなるものと理解していた昔の日本人には、自然と関わる技術は必要ではなかった。

イ アリストテレスは、ある物事が現実^{じつ}に存在している状態の中に、その物事の生成のプロセスまでも見ていた。

ウ 木という素材の中から予め思い描^{おもひがし}いている仏の姿を彫り出すことのできる仏師こそが、日本においては一流とされた。

エ ハイデガーは、西欧哲学史を見直すことで、現代技術が古代ギリシャ人の影響下にあることを指摘した。

オ 華道で制作者の個性を殺すことが要請されるようになったことは、日本古来の意識が今では失われている証^{あかし}と言える。

カ 技術に対する人間の無能さを自覚することに、科学技術が生み出した事態を変える可能性が秘められている。

都合により省略。

三 次の文章は『蜻蛉日記』の一節である。作者の家にいるときに体調を崩し、その後自邸に戻っていた夫藤原兼家の「夜に紛れて来てくれ」という要望によって、作者は人目を気にしながらも兼家邸を訪れた。これを読んで、後の問に答えよ。

(配点 五十点)

いと暗うて、入らむかたも知らねば、(兼家)「あやし、ここにぞある」とて、手を取りて導く。(兼家)「など、かう久しうはありつる」とて、日ごろありつるやう、くづし語らひて、とばかりあるに、「火ともしつけよ、いと暗し」、¹「さらにうしろめたなくはな思しそ」とて、屏風の後ろにほのかにともしたり。「まだ魚なども食はず、今宵なむ、おはせば、もろともにとてある」、^(注3)「いづら」など言ひて、もの参らせたり。すこし食ひなどして、^(注4)「禪師たちありければ、夜うち更けて、^(注5)護身にとてものしたれば、^(注6)「いまはうち休み給へ。日ごろよりはすこし休まりたり」と言へば、大徳、²「しかおはしますなり」とて、立ちぬ。

さて、夜は明けぬるを、^(注6)「人など召せ」と言へば、……(中略)……「なにか。今は粥など参りて」とあるほどに、昼になりぬ。さて、³「いざ、もろともに帰りなむ。または、ものしかるべし」などあれば、「かく参り来たるをだに、人いかにと思ふに、御迎へなりけりと見ば、いとうたてものしからむ」と言へば、^(注7)「さらば。男ども、車寄せよ」とて、寄せたれば、乗るところにも、かつがつと歩み出でたれば、いとあはれと見る見る、^(注7)「いつか、御歩きは」など言ふほどに、涙浮きにけり。「いと心もとなければ、明日明後日のほどばかりには参りなむ」とて、いとさうさうしげなる気色なり。⁴

^(注8)すこし引き出でて、牛かくるほどに見通せば、ありつるところに帰りて見おこせて、つくづくとあるを見つつ、引き出づれば、心にもあらで、かへり見のみぞせらるるかし。

さて、昼つかた、文あり。なにくれと書きて、

「X かぎりかと思ひつつ来しほどよりもなかなかなるはわびしかりけり」

返りごと、「なほいと苦しげに思したりつれば、今もいとおほつかなくなむ。『なかなか』は、

Y 我もさぞのどけきとこのうらならでかへる波路^{なみぢ}はあやしかり

さて、なほ苦しげなれど、念⁵じて、二三日のほどに見えたり。やうやう例⁶のやうになりもてゆけば、例^(注9)のほどに通ふ。

(注) 1 くづし語らひて……片端から少しづつ話して。

2 「火ともしつけよ、ゝ思しそ」……「火ともしつけよ、いと暗し」は兼家が自邸の侍女に言った言葉、「さらにゝ思しそ」は兼家が作者に言った言葉。

3 「いづら」……兼家が自邸の侍女に食膳の用意を催促する言葉。

4 禅師たち……ここでは、病氣平癒のための祈禱^{きとう}をする僧たち。後出の「大徳」はその中の高德の僧。

5 護身……真言^{しんこん}の修法で、印^{いん}を結び陀羅尼^{だらに}を唱えて心身を護持^{ごぢ}する法。

6 「人など召せ」……娣宅の準備のために、兼家邸の侍女を呼んでくれと兼家に頼む作者の言葉。

7 かつがつと……ここでは「危ない足どりで」の意味。

8 すこし引き出でて、牛かくるほどに……作者が乗り込んだ車を少し外へ引き出して、牛を車の轅^{なかがえ}につける時に。

9 例のほどに通ふ……兼家の訪れが間遠になったことを言う。

問一 波線部 a「給へ」、b「参り」、c「思し」は、それぞれ誰に対する敬意を表しているか。最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 作者 イ 兼家 ウ 禅師たち エ 侍女 オ 男ども

問二 傍線部1・2の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「さらにうしろめたくはな思しそ」

ア 絶対に気を緩めないでくださいね

イ これ以上気がかりなことはないはずだ

ウ なにも心配なさつてはいけないよ

エ これで気持ちが落ち着きなさるだろうよ

オ ほんとうは気がとがめていたのだよ

2 「しかおはしますなり」

ア いくらかご気分がよくおなりになったようだ

イ いまから外出するのはよくないでしょう

ウ そこに奥様がいらつしゃっているようだ

エ お加減が悪くなったらすぐに祈禱し申し上げよう

オ それでは我々は退出した方がよいようだ

問三 傍線部3「いざ、もろともに帰りなむ」では、兼家が自分も一緒に作者の家に帰ろうと言っている。これに對して作者はどのような断つたのか。わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部4「さうざうしげなる気色なり」・5「念じて」をそれぞれ現代語訳せよ。

問五 Xの和歌「かぎりかと思ひつつ来しほどよりもなかなかなるはわびしかりけり」には、兼家のどのような心情が詠まれているか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア あなたが私の容態を心配してくれたことがうれしくて、一緒にいられないと思う日ごろのつらさもかえっていい思い出になったよ。

イ あなたが私の家にしてくれた間は気分がよかったが、ひとりになった途端に具合が悪くなってきた、心細くてしかたがないよ。

ウ もうこれでおしまいかと思つて、あなたの家から帰ってきたときの苦しさをあらためて思い出し、今日の別れがいつも悲しかったよ。

エ あなたと逢うのも最後かと思いながら自邸に戻つて来たときよりも、なまじ束の間逢瀬だった今日の方がかえつてつらいことだよ。

オ わざわざ来てくれたことはうれしいが、あなたの気持ちが今ひとつわからなくて中途半端な状態をどうにもできないのがもどかしいよ。

問六 Yの和歌「我もさぞのどけきとこのうらならでかへる波路はあやしかりけり」にみられる表現や心情を説明した、次の文章の空欄A～Cにあてはまる語句を、A・Bは漢字一字で書き、Cは後のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

「とこのうらならで」には、近江おうみの国（＝現在の滋賀県）の地名「鳥籠とこの浦」に、「（A）の裏」の意味を掛けて、夫婦としてのんびりとした二人の時間を過ごすこともできずに帰ってきた作者のせつない思いが詠まれている。「かへる」には、「（B）る」と「帰る」が掛けられており、また、「波」は、「浦」「（B）る」と（C）の関係になっている。

C ア 枕詞 イ 掛詞 ウ 序詞 エ 縁語

問七 傍線部6「例のやうになりもてゆけ」と同じ内容を表すと思われる古語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア いたはる イ おこたる ウ ときめく エ かしづく オ おこなふ

問八 『蜻蛉日記』よりも前に成立したと考えられる作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 讃岐さぬきのすけ典侍日記 イ 紫式部日記 ウ 和泉いずみ式部日記 エ とはすがたり オ 土佐日記

国語の問題は次の頁へ続く。

四 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)(配点 四十点)

范^{はん}液^{えき}有^ハ口^ハ才^ハ、薄^{ニシテ}命^ハ所^{カフ}向^{ナリ}不^{ナリ}偶^{ナリ}。曾^{かつて}為^{つくり}詩^ヲ曰^ク、

A 拳^{グレバ}意^ヲ三^ハ江^ハ竭^{ツキ}

興^{セバ}心^ヲ四^ハ海^ハ a

南^{ノカタ}游^{アソベ}李^バ邕^リ死^シ

北^{ノカタ}望^{メバ}守^{シメ}珪^{けい}俎^{そスト}

液^{スルモ}欲^ニ投^{セント}二^ニ公^ハ、皆^ヒ会^ニ其^ノ淪^{りん}歿^{ぼツ}、^{スルニ}故^フ云^レ然^{しか}。

宗^ム叔^ハ范^ハ純^ハ、家^ニ富^ム於^ニ財^ハ。液^ニ每^ル有^レ所^ニ求^ム、純^ニ常^ニ給^{スルコト}与^ニ之^ハ、非^ズ一^ヲ。

純^ニ曾^テ謂^{ヒテ}液^ニ曰^ク、「君^ニ有^{レドモ}才^ハ而^ニ困^{シム}於^ニ貧^ハ迫^ニ。可^{シト}試^ミ自^ラ詠^ム。」液^ハ命^ジ紙^ハ筆^ヲ、

立^{チドコロニ}操^{トリテ}而^ニ竟^ヲ。其^ノ詩^ハ曰^ク、

B 長吟太息問皇天^ニ

神道^ハ由来也^①已偏^①
また | かたよレルカト

一名国士^ハ皆貧病

但是^ダ裨^レ兵^ヒ總^{ヘイノミ}有^{スベテ}錢^{リト}

純大笑曰、「教^ニ君自詠^マ何罵^ゾ我^の乎^の。」^②不^ト以為^ヲ過^ト。^③

〔『封氏聞見記』による〕

（注）

- 范液……人名。
- 薄命……不運。
- 不偶……不遇。
- 拳^レ意……心を動かす。「興^レ心」も同じ。
- 三江……世の中の全ての川の総称。
- 四海……東西南北、四方の海。
- 李邕・守珪……守珪は張守珪のこと。李邕・張守珪ともに唐代の有力者。
- 投調……面会を求める。
- 淪歿……死ぬ。
- 宗叔……叔父。
- 長吟太息……長く声を伸ばして詩をうたい、大きなため息をつく。
- 皇天……大いなる天。

○神道……人知では計り知れない不思議な法則。

○由来……もともと。

○一名国士……国士と呼ばれるような人。「国士」は国を代表するすぐれた人物。

○裨兵……野蠻な軍人。

問一 傍線部㊦「故」、㊩「已」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

問二 空欄 a を補うのに最も適当な語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 満みち イ 渴か ウ 荒あ エ 枯か オ 平たいラカナリ

問三 傍線部①「液 毎 有 所 求、純 常 給 与 之、非 一」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 范液が金銭の援助を求めている、范純は一度も与えなかった。

イ 范液が金銭の援助を求めている、范純は一度しか与えなかった。

ウ 范液が金銭の援助を求めると、范純はいつでも与えてやった。

エ 范液が仕官の世話を頼んでも、范純は一度も相手にしなかった。

オ 范液が仕官の世話を頼むと、范純はいつでも引き受けてくれた。

問四 B の詩について、この詩の形式を漢字四字で記せ。

問五 傍線部②「何罵我乎」とあるが、范純が「罵我」と言ったのはどうしてか、六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 傍線部③「不_ニ以_レ為_レ過」を書き下し文に改めよ。

